

二項対立という視点から見る『嵐が丘』

An Essay on Wuthering Heights from the Two Viewpoints

中川 右也**
NAKAGAWA Yuya

概要

本稿では『嵐が丘』を二項対立という視点から考察する。まず、『嵐が丘』において語り手の視点をもたらしている効果を解き明かした後、作者エミリー・ブロンテの非キリスト教的独自の世界観を解明する。その際、生と死、文明と自然、という二項対立を軸として読むことが作品理解にとって有効であることを示したい。

1. 物語の視点

この「嵐が丘」は、一般の小説のような全知の視点から語り手が物語を語っていく形式ではなく、登場人物の発した言葉や手紙だけで書かれている。その中で、ネリー・ディーンという家政婦が登場し、物語のほとんどを彼女が語る。彼女は作品の中において、ただの家政婦ではあるが、作品の多くの悲劇的な災いには、彼女の行動が深く関与しているということが、注意深く読んでいくと垣間見る事ができる。この作品は、ヒースクリフの復讐撃ばかりに目が行きがちだが、ネリーの行動に着目すると、この作品の別の見所を発見し、尚且つ次のような重大な出来事に彼女が関与しているということがわかる。

まず1つ目に、キャサリンがエドガーからの求婚を受け入れたときの苦悩話を、ネリーが話しているとき、それをヒースクリフに聞かれて、彼が家を去った事をキャサリンには知らせなかったことが挙げられる。もしも彼女が事実を伝えていたのならば、キャサリンとヒースクリフの運命は変わっていたはずである。

2つ目に、エドガーに自分とヒースクリフの選択を迫られたキャサリンが、錯乱状態になっていたときに、ネリーはそれを芝居ではないかと言い、キャサリンを死ぬ寸前まで看病もせず、衰弱させた事。

3つ目に、誰よりもヒースクリフとイザベラの駆け落ちを知っていながら、二人を完全に追う事ができなくなるまで、エドガーにはそれを報告しなかった事。

最後に、健康状態も悪く、性格も悪いヒースクリフの息子のリントンを、ヒースクリフの陰謀通り、キャサリン・リントンと結婚させようと、手助けをし続けたことである。

2. 『嵐が丘』の世界観

この作品の作者であるエミリー・ブロンテが抱く世界観は想像を絶するものであるがゆえに、この話しは語り手であるネリーによって語られ、それによって異常な物語を少し緩和する効果があると考えられる。また、ネリーは、自分を美化し、読者に良い印象を与えようとしているのが窺えるセリフも所々観られるが、しかしこの嵐が丘に登場する人物の中では唯一の一般人といえよう。この作品の中で、ネリーがキャサリンの言う事が理解できなかった箇所ですそれを裏付ける事ができる。

「ネリー、あたし自身がとりもなおさずヒースクリフなの！彼はつねに、つねにあたしの心の中にあるの。あたし自身がかならずしもつねにあたしにとって喜びではないのと同じに、彼も喜びとしてではなく、ほかならぬあたし自身としてあたしの心の中にあるの。だから、あたしたちが別々になってしまうというようなことは、二度といわないでちょうだい。そんなことはありっこないんだから、そして—」キャサリンはそこで言葉をきって、わたしの服のひだに顔を埋めましたが、わたしはむりにそれをはねのけました。もうこのばかげた話にがまんができませんでした。(82-83)

* 原稿受理 平成 22 年 10 月 18 日

** 一般科目

ここで我々読者が注意を払わなければならない点は、ネリーの言葉ではなく、キャサリン自身の言葉を理解しなければ、作者が抱く世界観を真に理解できないということである。キャサリンが述べている事は一般の人では理解しがたいかもしれないが、彼らの魂は元々一つで、二人がひとつになってはじめて完全な人間になるという、プラトンのいうプラトニックラブ的な思想を見ることが出来る。つまり、彼らは元々いっしょであり、完全体であったが、それが離れ離れに現在になってしまっていると作者はキャサリンを通して読者に伝えているのである。

3. 自然と文明の二項対立

二人を離れ離れにしてしまったのはまさしく“文明”である。この物語はこの“文明”と“自然”の二項対立を中心に描かれているとも考えられる。この作品のタイトル自体、自然の象徴“嵐”と密接に関係している。

「それにしても、この男の子は誰だろう？どこで連れになったんだろう？おお！そうだ、これは亡くなったアーンショー老人が、リバプールへ出かけて行った時、拾ってきた子だ。東インド通いの船にでも乗っていったかそれともアメリカ人かスペイン人が捨てていった子だね。」

(50)

このように、作者があえてヒースクリフに属性をつけなかったのも、その文明などから拘束される事なく“自由”をヒースクリフにあたえて、文明と対立する“自然”を彼に描写させたかったのである。その証拠に、彼にはファミリーネームがなく、ジブシーとして登場している点からも考察でき、まさしくそれは何の拘束もない自由の象徴であるといえる。

彼は自分達を引き裂いた文明的なものに挑戦していく。屋敷を手に入れたり、金を手に入れたりした理由も、自分を不運にした文明への復讐であったのである。文明は彼の敵。彼は事実、自分の欲望ではなく、復讐のためだけにそれらを手に入れた事が後にわかる。彼が手に入れた地位や金、屋敷はいらなかったのである。キャサリンを手にした後はそれらを他人に譲った事からもそのことがわかる。

文明への憧れを抱き、不運を招いた原因人物はキャサ

リンであるが、彼女も元々は“自然”に属していたと考えられる。よってエドガーと結婚した後に苦しむ事になる。しかし最後に彼女は最愛なるヒースクリフと一体になる。その時、彼女は幼児として亡霊であられる。元の自然児として描かれている点からみても、彼女が自然に帰ったからこそ二人は最後結ばれたと、ここでは考えられる。

逆に、ヒースクリフから考察すると、なぜ彼も一体になれたのかを考えた際、自分の存在を脅かすものへの復讐が終わり、彼の前にはその敵が存在しなくなったからである。その結果、彼は敵がいなくなった事に空しさを感じ、元の自分（自然）にもどったのでキャサリンと一体になれたのである。

これらの一連の出来事は、彼らが自然へと帰っていったことの1つの象徴でもある。また、死ななければキャサリンに会えなかったことから、魂と魂の合一は死ぬ事にあり、“死”こそ、彼らの至福という作者の思想があらわれている。それは人生の終わりという意味においての“死”ではなく、無限である宇宙の永遠の時の中に入っていくという、作者自身の独特の世界観をここから垣間見る事ができる。つまり、彼女は死を決して恐れていないということである。

4. 『嵐が丘』の宗教概念

この作品には度々教会など、キリスト教に関係するものなどが登場するが、作者が抱いている宗教観はそれとは異なる点がいくつかある。

「天国はあたしのいるところじゃなさそうだと言いたかったまでよ。あたしは地上に帰りたいといって胸が張り裂けんばかりに泣いたわ。すると天使達がとても怒って、あたしを嵐が丘のてっぺんの原っぱのまん中に投げ下ろしてしまったの。そこであたしはうれし泣きに泣いているところで目がさめたの」(80)

ここでキャサリンは喜びの涙をこぼしているが、これはキリスト教的概念とは全く逆である。ミルトンの失樂園にもあるように、天は樂園、地はまさしく樂園を失った世界のはずだが、この物語の最後も決して天ではなく、その地上で二人が結ばれて終わっている事からも、作者

の独特の世界は、まさにこの地上に楽園があるという概念である。ここでも“自然”と“文明”のように“天”と“地”の二項対立がみられる。彼らが地上で結ばれる事が意味するのは、魂と魂が地上で一緒になり、永遠性を最後に抱いたことである。つまり、死すべき者として“生”と“死”と二項対立にとらわれ、“肉体”と“精神”の二項対立の中で肉体に縛られている地上の有限の存在である人間を、無限なものにし、全てを取っ払って自由な空間を作者はこの作品で描き、またそれが彼女の抱いていた世界観でもあったのである。人間が完全になったもの（魂と魂）は、永遠になって、一切のしがらみがなくなって自由になれると彼女は考えていたのである。これが彼女の持っていた宗教概念である。

5. おわりに

この作品は、ヒースクリフの過激な復讐が一番強く印象を与えるが、こうして語り手のネリーの言葉だけでなく登場人物の発言に注意を払うと、作者のこの作品を通して我々読者に語りかけている別の箇所を見出す事ができる。私自身も、この小説をこういった視点で読んだ二回目と、知らずして読んだ初回の印象が大きく異なったのも、作者のこの作品に仕組んだプロットに理由があると考えられる。読者がこの作品をどう捉えるかは各々違うと思われるが、少しでも作者の考えを正確に引き出すには熟読が必要であることに、この作品を読んで感じ、その良い機会をこの作品は私に与えてくれた。本稿では、ネリーの発言だけに注意を払うと作者が抱く本当の世界を理解できない点と、作品のあらゆる箇所の二項対立を考察すると、作者のプロットの真意を理解できるという点がわかった。読者によって作品の捉え方が違う理由もわかり、小説の奥の深さを痛感したのと同時に、少しは作者の抱く世界に自分が入れた事に満足と感動を感じる。

参考文献

- E・ブロンテ. 三宅幾三郎 松村達雄訳『嵐が丘/詩』,
河出書房, 1968年.
広野由美子. 「嵐が丘の謎を解く」, 創元社, 2002年.